

「波乱の時代(上・下)—わが半生とFRB—」

アラン・グリーンズパン(著)、山岡洋一・高遠裕子(訳)

日本経済新聞社 2007年11月12日刊

本書は、社会経済環境がめまぐるしく変わる現代、18年以上もアメリカの中央銀行である連邦準備制度(FRB)の議長を務めたアラン・グリーンズパンの自伝(上巻)と彼の世界経済分析と将来予測(下巻)から構成されている。

本書はアメリカ政治や金融政策に関心のある方はもちろん、職業エコノミストの仕事を知りたい方にも最適の入門書になるだろう。上巻の自伝の部分は極めて率直かつ飄々と書かれており、ユーモアに溢れている。また、自らが仕え、交渉した歴代の大統領に関しても遠慮無く評価を下している。すなわち、歴代の大統領の中ではニクソンとクリントンの2名が最優秀であったと明記している。あのウォーターゲート事件を起こして辞任に追い込まれたニクソンが政治家としては極めて優秀であったという判断はいかにもグリーンズパンらしいと思う。

本書を通して、グリーンズパンは終始一貫して、FRB議長である前に一人の職業エコノミストとしてどう判断してきたかという立場をとっている。これは、長年、産業アナリストあるいはコンサルタントとして実態経済を分析してきたという自負もあるのだろうし、FRB議長は最終的な判断の全責任を負っているという厳しさの表れでもあるだろう。

本書を読むと職業エコノミストとは個人の総合力で勝負する職業だということがよく分かる。もちろん、人生には運もつきものであり、グリーンズパンは自らを最も幸運なエコノミストであったと述べているが、節度を保ち、決定的な場面で判断を間違わないできた彼の実績に対して高い評価が与えられてきたのである。

下巻での世界経済の見通しと将来予測の中では、様々な側面への関心が表明されており、これがグリーンズパンの経済分析の多様性を反映しているものと考えられる。とりわけ、FRB議長として経験から、将来のインフレ再燃を懸念し、それに絡んでFRBの独立性が問われるような事態に陥る可能性を憂慮している点は重要である。またヘッジファンドへの規制に懐疑的であるのも特徴的である。